

# 総称文の多様性\*

## —— ヘブル語と日本語データによる検証 ——

### (The Variety of Generic Sentences: Supporting Evidence from Hebrew and Japanese Data)

岩 部 浩 三

#### 0. 総称文研究の新しい枠組み

総称文は多様である。英語においては、無冠詞複数形 (Bare Plural (以下 BP)) 主語をとるほか、不定単数形 (Indefinite Singular (以下 IS)) や定単数形 (Definite Singular (以下 DS)) の形式がある。<sup>1</sup>

- (1) a. Tigers are striped. (トラには縞模様がある。)
- b. A dog has four legs. (犬というものは4本脚である。)
- c. The bottle has a narrow neck. (瓶というものは首が細い。)

そのうちで無標の形式は (1a) のような BP であり、総称文研究の多くは BP を対象にして来ている。他の言語においても、同様に総称文の多様性が見られる。その一方で、総称文として使用される文形式は総称文以外にも用いられる。(1) においても、述語の種類が個体レベル述語 (Individual-level Predicate) から場面レベル述語 (Stage-level Predicate) に変われば、それらは総称文ではなくなる。総称文には専用の言語形式がないと言われる所以である。

総称文が一般化という人間の根源的な認知能力を反映していることは言うまでもない。近年特に注目に値するものとして、Leslie がデフォルト的認知能力という視点から総称文研究を推進している。<sup>2</sup> 私自身も Leslie の視点を受け入れながら、総称文研究の枠組みを提案して来た (岩部 (2016, 2019, 2020))。現時点での見取り図は (2) のとおりである。

(2) 認知能力に基づく総称文研究の枠組み

速い思考 (システム 1) :

子供の認知能力 (危険回避・直観的行動, 社会的偏見, 脳の負担小)

デフォルト総称文: Striking Generic 可能, 複数形の使用, 冠詞の使い分けが (厳格で) ない (英語・ドイツ語・フランス語)

遅い思考 (システム 2) :

大人の認知能力 (社会的偏見を避ける論理的行動, 脳の負担大)

有標総称文: 冠詞の使い分け (不定冠詞単数, 定冠詞単数, 不定冠詞複数 (フランス語)), 量化 (数量詞, 法性), 「というもの・ものだ」の使い分け (日本語), 二重否定

この枠組みでは多様な総称文を上下に分類し, 上を子供の認知能力すなわちデフォルト的認知能力に対応するデフォルト総称文, 下を大人の認知能力・言語能力を前提にした有標総称文と名付けている。この表に基づきながら, 第1節では英語総称文による枠組みの簡単な説明をおこなう。第2節ではフランス語・ドイツ語との比較を論じ, 第3節では日本語総称文の多様性に論を進める。以上は過去の研究のまとめであり, 本論文の新しい主張は第4節以降である。第4-5節では Greenberg (1998, 2002) のヘブル語の代名詞的コピュラ (Pronominal Copula) の分析の再検討をおこない, 第6節はその延長上にある同定文に関する観察である。具体的には, ヘブル語と日本語の類似性に注目し, Greenberg の主張の不備を指摘し, 上記枠組みの有標総称文の一つとしてヘブル語代名詞的コピュラを位置づけることを提案する。第7節は, Greenberg (2008) が同定文として論じている別のタイプの代名詞的コピュラを取り上げ, これも有標総称文に位置づける方向で論じる。第8節では本論文の結論と今後の見通しを述べる。

## 1. 英語総称文による枠組みの説明

英語総称文の中で最も一般的な形式は BP であり, これがデフォルト総称文に相当すると考えられる。そして Leslie が Striking Generic と呼ぶ (3) のような総称文が自然に受け入れられるのは, この形式だけである (Leslie et al. (2009))。

(3) Sharks attack bathers. (サメは海水浴客を襲う。)

Striking Generic の特徴は、ごく少数のものにしか当てはまらなくても受け入れられるところであり、(1) のような多くの総称文がすべて、あるいはほとんどの個体に当てはまるのと対照的である。Striking Generic の (3) は人間にとって生死に関わる危険性を述べている。生存のためには、どのサメが危険であるか、あるいは危険なサメの割合はどの程度かなどをじっくり考えるより、直観的にサメ全体を避けることでその危険を逃れることの方が重要である。まずここに総称文の重要な役割があることに留意しておかなければならない。Gelman et al. (2015) は、all や some などの明示的数量詞が4歳以降まで習得されないのに対し、総称文は3歳以前に習得されていることを明らかにしている。すなわち、総称文 (の少なくとも一部) は数量詞を解釈するのに必要な量化の能力が身につく前から使用可能であることになる。そこで、デフォルト総称文は、量化などの高度な言語能力が十分に発達する以前の認知能力、すなわち子供の認知能力に対応するものと考えられる。<sup>3</sup>

デフォルト総称文の BP が複数形であるのに対し IS は単数形である。

- (4) a. Dogs have four legs. (犬は4本脚である。)
- b. A dog has four legs. (犬というものは4本脚である。)<sup>4</sup>
- (5) a. Tables have four legs. (テーブルは4本脚である。)
- b. ?A table has four legs. (? テーブルというものは4本脚である。)

IS 総称文は「種に内在的必然的な性質を表す」と言われている (Greenberg (2003), Prasada (2010))。4本脚であることが犬の内在的必然的な性質であるのに対し、テーブルは4本脚とは限らない。したがって IS の (5b) は不自然である。BP においてはそのような制約はなく (4a) (5a) ともに受け入れられる。IS 名詞句は本来任意の1個体を指すものであるので、これに総称的解釈を与えるためには「一つずつ数え上げる」という量化が前提となる。概略、「どれを取っても」という含みを持つと考えて良い。そして、ここにある必然性の含意も背後にある量化に由来するものであろう。このような量化の能力が some や all などの基本的な数量詞の習得に先行して存在しているとは考えられない。すなわち、IS は大人の認知能力を前提とする有標総称文の一つと考えられる。

DS を取り上げた研究は少ないが、これは「良く確立された種 (Well-established Kind)」を表すとされている (Carlson (1977), Krifka et al. (1995))。

- (6) a. The bottle has a narrow neck.  
 (瓶というものは細い首を持つものだ。)
- b. The Coke bottle has a narrow neck.  
 (コーラ瓶というものは細い首を持つものだ。)
- c. ??The green bottle has a narrow neck.  
 (?? 緑瓶というものは細い首を持つものだ。)
- d. Green bottles have narrow necks.  
 (緑色の瓶は細い首を持つ。)

良く確立された種とは、種について聞き手にも共有されていると考えられる知識であり、DS 主語を耳にすればどのようなものが想定できるようなものである。定冠詞のない日本語においてはそれがどのように表現されるか検討の必要があるが、(6b)と(6c)の容認度の差から、複合語として表現できることが良く確立された種の一つの条件であると考えられる。<sup>5</sup>

上で述べたように Striking Generic は危険回避という重要な役割を果たしているが、これが人間に適用された場合、社会的偏見を生む。デフォルト的認知能力は大人になっても維持されており、危険回避のために発動されうるが、その負の面がここに現れている。哲学者としての Leslie の主要な関心は、総称文の細かな言語学的分析よりむしろここにあるようである。

- (7) Muslims are terrorists. (イスラム教徒はテロリストだ。)

しかしながら、Striking Generic (3) を IS 形に変えた (8a) は不自然であるとされている (Leslie et al. (2009))。問題の総称文 (7) の IS 形式 (8b) もまた不自然である。すなわち、多様な総称文の細かな使い分け、ここでは BP と IS の使い分けを徹底すれば社会的偏見という負の面を克服できる可能性がある。

- (8) a. ?A shark attacks bathers.  
 (? サメというものは海水浴客を襲うものだ。)
- b. ?A Muslim is a terrorist.  
 (? イスラム教徒というものはテロリストだ。)

英語総称文の多様性はおおよそ以上の通りであるが、そもそもどうしてこ

のような多様性が存在し、その使い分けがなされるのであろうか。言語習得の過程においては、デフォルト総称文であるBPが先行するはずである。そしてBPにはISやDSに見られる制約がない。言い換えれば、漠然とした幅広い使い方ができるということである。それをふまえて、私は以下のような「認知能力の複合性仮説」を立てている。

(9) 認知能力の複合性仮説(岩部(2016, 2019))

- a. デフォルト的認知能力に対応する英語総称文の形式はBPである(無標の形式)。3歳以前の幼児は他の認知能力が未発達であり、ISやDSで区別されるような多様な読みは未分化の状態にある。
- b. 大人になるにつれて(数理的・論理的)認知能力が発達し、総称文の読みの多様性が生じ、BP総称文が多義的に感じられるようになる。多義性を区別するため、特定の読みに対応する別の形式が求められるようになり、ISやDSなど有標の形式がそれを担う。

この仮説の下では、従来から指摘されている総称文の謎めいた特徴にも納得がいく。ISやDSにはそれぞれ特化した意味があるのに対して、BPはオールマイティであり英語総称文3形式の分担範囲が均等でないこと、有標の総称文形式が数理的・論理的認知能力、あるいは完成された文法能力など大人の認知能力を前提とした解釈だけに対応すること、などである。また、(9)が人間の認知能力という普遍的な現象を反映したものであるなら、これは英語特有のものではなく他言語にも当てはまると予測される。実際、多くの言語において総称専用の特定言語形式がなく、複数の総称文形式が見られることが指摘されているが、この枠組みから含意される予測がどこまで当てはまるか、これから検証を進めて行きたい。

## 2. フランス語とドイツ語の場合

英語においては不定冠詞や定冠詞は有標総称文にのみ現れ、デフォルト総称文は無冠詞である。このことから、数量詞と同様、冠詞の使い分けも大人の認知能力に属するものではないかと推測される。一見、これに反すると思われるのはフランス語であり、最も一般的な形式が定冠詞複数形である。

- (10) a. \*(Les) chats sont intelligents.  
 b. (\*The) Cats are intelligent.

さらに奇妙なのはドイツ語の場合で、Schaden (2013) によれば、ドイツ語総称文では定冠詞複数と無冠詞複数が相互互換的に使われる。つまり、定冠詞はあってもなくても良いということになる。

- (11) a. (Die) Wale sind Säugetiere.  
 b. (\*The) Whales are mammals.

これら3言語において、通常の定冠詞の使い方は基本的に共通であるが、デフォルト総称文に限ってその使われ方がばらばらになっている。<sup>6</sup> フランス語は英語と異なり、名詞句の無冠詞をほとんど許容しない言語であるため、定冠詞を統語的にやむなく使用していると思われる。いずれにしても、デフォルト総称文における定冠詞の使用には意味論的裏付けはないと考えざるをえない。そうでなければ英独仏3言語の間の食い違いはまったく不可解な現象になってしまう。そしてその背景としては、冠詞の使い分けの能力が身につく以前にデフォルト総称文が使用されるということがあるのでなかろうか。

以上、英語のデータを元に枠組みの概略を示し、それにフランス語とドイツ語のデータを加えて考察してきた。これら3言語は冠詞を持つ言語であり、それを活用して有標総称文が形成されていることがわかる。それでは、冠詞を持たない言語においてはどのような工夫がなされているのであろうか。このような視点からの研究は従来ほとんどなされていない。それだけに、手探りのような状態で研究を進めざるをえないが、それだけにこの枠組みから新しい知見が得られる可能性がある。

### 3. 日本語の場合

岩部 (2016, 2019) では、英語 IS に相当する日本語から探求を始めている。例文 (4b) (5b) の日本語訳において前触れなく示したように、IS は「というもの」という日本語に相当するのではなかろうか。<sup>7</sup> まず始めに、英文の容認可能性とそれぞれの日本語訳の容認可能性は対応しているように思われる。

- (4) a. Dogs have four legs. (犬は4本脚である。)  
 b. A dog has four legs. (犬というものは4本脚である。)
- (5) a. Tables have four legs. (テーブルは4本脚である。)  
 b. ?A table has four legs. (? テーブルというものは4本脚である。)

A dog という不定名詞句は犬という属性を持つ任意の1個体を表している。つまり、「犬という属性を持つあるもの」であって、dog (x) という論理表示に相当する。また、単数を基に総称性を表すためには量化が必ず必要であり、この x は変項としての解釈を受けることになる。もし複数形であれば必ずしも量化が前提とはならず、例えば Carlson (1977) のように BP が種全体を表すという分析も可能であるが、すでに述べたように IS を総称的に解釈するためには量化が前提となる。<sup>8</sup> 日本語においては、「犬というもの」という表現はそれ自体 dog (x) のように属性化した論理表示そのものであり、それを通じて量化が引き起こされ、英語 IS と同等の有標総称文になり得るのである。

#### 4. Greenberg によるヘブル語総称文の分析

興味深いことに、ヘブル語の代名詞的コピュラ (Pronominal Copula) において、日本語の「というもの」によく似た現象が見られる。残念ながら、私にはヘブル語そのものについての知識がないので、Greenberg の論文から得られる内容を基に思考をめぐらすしかなく、限定的な考察になることを最初にお断りしておく。<sup>9</sup>

Greenberg (1998) によれば、ヘブル語において、過去形や未来形には動詞的コピュラ (Verbal Copula) が使用されるのに対して、現在形では代名詞的コピュラ (Pronominal Copula (以下 Pron)) が使用されるという。

- (12) a. Dani haya xaxam. (過去形)  
 “Danny was wise.”  
 b. Dan yihye xaxam. (未来形)  
 “Danny will be wise.”
- (13) a. Dani hu gavoha. (現在形3人称男性単数)  
 Danny PRON(3MS) tall  
 “Danny is tall.”

- b. Rina hi xaxama. (現在形3人称女性単数)  
 Rina PRON(3FS) smart  
 “Rina is smart.”
- c. ha’ etim Seli hem kxulim. (現在形3人称複数)  
 the pens mine PRON(3PL) blue  
 “My pens are blue.”

Pron は (14) のように削除されることもある。

- (14) Dani xaxam.  
 Danny wise

この削除可能性について、Greenberg (1998) は次のような仮説を立てている。

- (15) a. oblig.-Pron sentences can be interpreted as nongeneric only.  
 (Pron が義務的に削除される文は非総称的にしか解釈できない。)  
 b. oblig.+Pron sentences are interpreted as generic only.  
 (Pron が義務的に生じる文は総称的にしか解釈されない。)  
 (Greenberg (1998: 128))

この仮説では、Pron が随意的な場合が記述されておらず、それをどうするかという課題が残るが、とりあえず用例を見てみよう。<sup>10</sup> (16) は Pron が義務的に生じる場合である。

- (16) ‘orvim \*(hem) (yecurim) Sxorim.  
 ravens PRON(3PL) creatures black  
 “Ravens are black (creatures).”  
 カラスというものは黒いものだ。

例文 (16) は明らかに総称文であるが、特に述語にわざわざ yecurim (=creatures) が補われていることが注目される。<sup>11</sup> これは必須要素ではなさそうであるが、ここではその解釈が強く意識されているように思われる。日本語訳に示したとおり「というもの」「ものだ」を伴う有標総称文的な解釈

がなされている可能性が高い。

他方、義務的に削除される場合は以下のとおりである。

- (17) Dani (\*hu) 'ayef 'axSav.  
 Danny PRON(3MS) tired now  
 “Danny is tired now.”  
 ダニーは今疲れている（ところだ）。

ここではいわゆる場面レベル述語が使用されており、nowに相当する副詞が補われている。「ものだ」ではなく「ところだ」という日本語がふさわしく、このような場合に Pron は現れない。以上、(15)の予測するとおり、Pron が義務的に生じる場合は総称的な解釈がなされ、Pron が義務的に削除される場合には非総称的な解釈が与えられている。

Pron の生起は主語によっても変わってくると言う。

- (18) a. zmaxim \*(hem) yerukim.  
 plants PRON(3PL) green  
 “Plants are green.”  
 植物というものは青い。
- b. ha-zmaxim ha-elu (hem) yerukim.  
 the plants the these PRON(3PL) green  
 “These plants are green.”  
 これらの植物は青い。

Pron が義務的に生じる (18a) は紛れもない総称文であり、主語は植物一般を指す。それに対して、主語が限定された (18b) では Pron は随意的である。

次は、主語も述語もまったく同じで、Pron の有無だけが文の解釈を決定している例である。

- (19) a. ha-šamayim hem kxulim.  
 the sky PRON(3PL) blue  
 “The sky is inherently blue, blue by their nature.”  
 空というものは青い。

- b. ha-šamayim kxulim.  
 the sky blue  
 “The sky is blue today/ at the moment.”  
 (今日は) 空が青い。

Pronの有無による意味解釈の違いは、Greenbergが副詞等を補って付けた英語訳によって明らかである。私が付けた日本語訳も、その英語訳によく対応していると思われる。

以上のように、(15)の仮説はそれ自体妥当であるように感じられる。しかし、(19a, b)において、Pronの存在は随意的であると言わざるをえない。(15)の仮説はPronが随意的な場合については何も言っていないので、(19a, b)の違いを述べることは不可能である。そこでGreenberg (2002)は、Pronが随意的な場合にも仮説を広げている。

(20) The distribution of Pron (extended generalization)

- a. The semantic structure of +Pron sentences (with subject in Spec, I) is headed by a generic operator (thus expressing generic statements).
- b. The semantic structure of -Pron sentences (with subject in Spec, I) is not headed by a generic operator (thus expressing nongeneric statements).

(Greenberg (2002: 278) 原文のまま<sup>12)</sup>)

一見してわかるように、Pronの有無を総称演算子 (Gen) の有無に直接結びつけようとしている。詳細を省けば、「+Pron文は総称文である」「-Pron文は総称文ではない」という単純な形になる。その上でGreenbergは、ヘブル語には総称性を表す明示的な形式 (すなわちPron) がある、という主張につなげているのである。総称文をGenと結び付けて分析するのは、2002年という量化分析全盛の時代背景からはやむをえないところもある。しかし、ヘブル語には総称専用の明示的な統語形式がある、という主張はきわめてユニークで、他言語において同様の主張は見られない。ヘブル語はそのような特殊な言語であるのだろうか。とりあえず我々の枠組み (2) を基にGreenbergの主張を位置づけてみると、次のような論点が指摘できるであろう。

- (21) a. ヘブル語総称文は Gen による量化によってすべて捉えることができるか。  
 b. ヘブル語総称文に多様性はないのか。

枠組みから予測される答はいずれも否である。まず、(21b) については少なくとも多様性があるという推論が成り立つ。Greenberg が主張しているのは、コピュラ文において総称性が専用の明示的な形式 Pron をとるということだけである。コピュラ以外の一般動詞については何も言っていない。総称文はコピュラ文に限定されたものではなく、一般動詞を用いた総称文も当然あるはずである。Greenberg は一般動詞の例を論じておらず、私自身ヘブル語の知識がないため、これ以上具体的に論じることはできないが、ヘブル語に総称を表す明示的で普遍的な形式があるのではなく、コピュラ文についてのみ有標的な形式が用意されているということになるであろう。(21a) については、Striking Generic がヘブル語でどのように表現されるか、など直接的な検証をおこないたいところであるが、残念ながらそれをただちにおこなえる環境にはない。次節では、Greenberg (2002) の量化を前提にした分析を精査しながら、その問題点を探ることによって答えを出すことにしよう。

## 5. Greenberg (2002) の検証

例文 (22) に対して Chierchia (1995) が与えている論理形式 (22a) には個体変項  $x$  と状況変項  $s$  (Situation Variable) が含まれている。Greenberg の論理形式 (22b) の特徴はさらに世界変項  $w$  が加えられているところである。<sup>13</sup>

- (22) Birds fly.  
 a. Gen  $s, x$  [bird ( $x$ ) & C ( $s, x$ )] [fly ( $s, x$ )] (Chierchia (1995))  
 b.  $\forall s, x, w'$  [bird ( $x$ ) in  $w'$  & C( $s, x$ ) in  $w'$  & R( $w', w$ )] [fly( $s, x$ ) in  $w'$ ]  
 (Greenberg (2002))

総称が普遍数量詞  $\forall$  と異なることは周知の事実であるが、ここではそれは問題としないことにしよう。(23) の英語の BP と IS の例はいずれもヘブル語では +Pron 文であり、総称的な解釈を受けることになるが、主語名詞句の部分が変項として解釈できるため、わざわざ変項  $w$  を仮定するまでもな

い。Greenberg が変項  $w$  を必要とするのは (24a) のような種叙述 (Kind Predication) の総称文である。

- (23) a. Ravens are black (creatures).  
 b. A raven is a black creature.  
 (24) a. Blue whales are rare creatures.  
 b. Q(P)

(24a) では種レベル述語 (Kind-level Predicate) が用いられており、これが表すのは Blue whales (シロナガスクジラ) という種全体の特徴であって、個々の個体の特徴ではない。種叙述の総称文については、Carlson (1977) 以来、(24b) のような単純な述語・項構造 (Predicate-Argument Structure) が認知されている (ここでは、Q=rare-creatures, P=blue-whales である)。ところが、種叙述総称文もヘブル語では義務的な +Pron 文であるため、(20) を維持するためには Greenberg はここでも Gen による量化を仮定しなければならなくなる。したがって (25) に対して (26) のような論理形式が仮定されている。細かい説明は省略するが、ここで重要なのは変項  $w$  を仮定しそれに対する量化がおこなわれている点のみである。

- (25) livyatanim kxulim \*(hem) yecurim nedirim.  
 whales blue PRON(3PL) creatures rare  
 “Blue whales are rare creatures.”  
 シロナガスクジラは珍しい動物である。

- (26) Modalized Kind Predication:  $\forall w'$  [R( $w'$ ,  $w$ )] [(Q(P) in  $w'$ )]  
 Paraphrase: In all worlds accessible from our world (w.r.t. the way the language is interpreted, what we know, etc.), the property Q is true of the kind P.

そもそも種叙述の総称文 (24) に量化を想定する証拠はあるのだろうか。Greenberg によれば、(23) (24) の例文には共通して何らかの必然性あるいは定義性が直観的に感じられると言う。それは、(27) のようなエピソードの総称文には感じられないものである。<sup>14</sup>

(27) Rats reached Australia in 1876.

(ネズミは1876年にオーストラリアに到達した。)

なるほど (27) は過去の偶発的な出来事を述べており、ここには必然性や定義性を感じとることはできない。(27) が量化表現でないことは確かであろう。しかし、(24) やそのヘブル語版の (25) が他の世界においても必然的に成り立つ内容であるとは直観的にも感じられない。シロナガスクジラが珍しいのはこの世界だけの偶発的な事柄ではないだろうか。カラスが黒いのは種そのものの内在的性質と言えるが、シロナガスクジラの個体数が少ないことがそうだとはいえないであろう。Greenberg が軽率に (23) (24) を同等に扱ったことには首をかしげざるをえないし、(25) が世界を超えて成り立つという帰結自体が不自然である。このように、種叙述総称文において w 変項を仮定する Greenberg の主張には同意できない。+Pron 文はすべて総称演算子による量化であるという (20) の仮定に固執しすぎて、種叙述文までそれに含めてしまったために無理な結論をもたらしてしまっている。+Pron 文に対して、量化以外の可能性も追求すべきであろう。本論文の見通しは、第6節で論じるように、+Pron 文は同定文と関係づけられるのではないかというものである。

Greenberg の量化分析のもう一つの問題点は個体レベル述語 (Individual-level Predicate) を含む場合である。(28) や (29) の例においては、Pron があってもなくても意味はほとんど変わらない。<sup>15</sup> その事実は Greenberg 自身も認めている。また Chierchia (1995) は、個体レベル述語は内在的に総称文であると述べている。<sup>16</sup> それに従えば、(28) (29) は Pron の有無にかかわらず、いずれも総称文ということになる。

(28) a. Dani more le-'anglit. (-Pron)

Danny teacher to-English

b. Dani hu more le-'anglit. (+Pron)

Danny PRON(3MS) teacher to-English

"Danny is an English teacher"

(29) a. Rina nexmada. (-Pron)

Rina nice

b. Rina hi nexmada. (+Pron)

Rina PRON(3FS) nice

“Rina is nice”

しかし、(20)に従えば Pron の有無によって意味的な相違がなくてはならない。彼女にとって総称文は +Pron の b 文の方だけなのである。そして、Pron の有無によって容認度に違いが出る例を引用しながら、この方向に議論を進めようとしている。

(30) ha-xaya ha-zot \*(hi) zebra. (=This animal is a zebra)

(31) a. ha-xaya ha-zot (hi) yafa. (=This animal is pretty)

b. ha-iš ha-ze (hu) more. (=This man is a teacher)

(30) においては、内在的・本質的な属性が述べられており、これは現世界を超えて他の世界でも成り立つため、Pron が義務的であると言う。他方 (31) においては必ずしも内在的・本質的な属性ではないため、Pron の削除が可能だとのことである。それでは、(29) の例に戻って Greenberg の説明を見てみよう。

(32) a. Rina (??hi) nexmada. ‘afilu ba-macavim haxi kašim hi titnaheg kaxa.

Rina PRON(3FS) nice. Even in-the situations most difficult she will behave like this

“Rina is nice. Even in the hardest situations she would behave like that.”

リナは親切だ。最も困難な状況においてもそんな風に振る舞うだろう。

b. Rina ?(hi) nexmada. ‘afilu ba-macavim haxi kašim tihye kazot.

Rina PRON(3FS) nice. Even in-the situations most difficult she will-be like this

“Rina is nice. Even in the hardest situations she would be like that”

リナは親切な人だ。最も困難な状況においてもその通りだろう。

容認度の違いを出すためにかなり念入りに文脈を整えている。そして、(32a) のような文脈では Pron は削除されるべきであり、Pron が残ったま

まだと容認度がかなり低くなるという。それに対して、(32b)では +Pronの方が自然だとのことである。しかしその判断は、疑問符の付け方からもかなり微妙であることがわかる。ここでの問題点は、w 項の有無ではない。そもそも -Pron 文には量化詞 Gen が含まれておらず、量化構造ですらないのである。<sup>17</sup> すなわち、(33a)の論理式のとおり -Pron 文には持続性・永続性を保証するものがそもそもないのである。そこで困った Greenberg は、(20)とは別に、Condoravdi の推論規則 (33b) を援用しつつ -Pron 文にも持続性を持たせようとしている。

- (33) a. Rina nexmada :  $\exists s$  [nice (s) & theme(s) =Rina]  
 b. Default inference (i.e. implication) : “if an s is going on at time t, and you have no information that it is not going on at some later time t', then infer that it is going on at that later time t' as well”  
 Condoravdi (1992: 9)

ここに至って、+Pron と総称性を強引に結びつける Greenberg の主張は崩壊し始めている。実質的に -Pron も総称を表せると言っているのに等しい。ここではむしろ、ヘブル語総称文に多様性を認め、(2)の枠組みにおいて -Pron の方をデフォルト総称文に位置づけ、+Pron 文の方を日本語の「というもの」や英語 IS などと同等に有標総称文に位置づける方が事実 に即しているように思われる。あるいは、デフォルト総称文においては Pron は随意的、すなわち使い分けがない、という扱いをすべきかもしれない。実際、そのような例はドイツ語の定冠詞にも見られたところである。

Greenberg の一般化 (20) の破綻は、さらに同定文 (Identity Sentence) において決定的なものとなる。元々は Doron (1983) が、Pron は同定文において義務的に生じる、という観察をおこなっていた。実際、(34)に見られるとおり同定文の Pron は省略できない。

- (34) Dani \*(hu) mar Cohen  
 Dani PRON(3MS) Mr. Cohen  
 “Danny is Mr. Cohen”

Greenberg の (20) から予測されるのは、同定文は総称文であるという帰結であるが、Greenberg はこれを否定する。

- (35) ha-yom ha' axot ha-toranit (\*hi) 'ayefa  
 the day the nurse the duty PRON(3FS) tired  
 “Today the duty nurse is tired”  
 今日、当直看護師は疲れている。
- (36) ha-yom ha' axot ha-toranit \*(hi) Rina  
 the day the nurse the duty PRON(3FS) Rina  
 “Today the duty nurse is Rina”  
 今日、当直看護師はリナだ。

(36) は同定文であり Pron を伴うにもかかわらず、(35) の場面レベル述語の例と同様、今日1日の一時的なことを記述している。これが総称文の永続性と相容れないと考えた Greenberg は、同定文を (20) の対象から外してしまう。そして同定文における Pron には総称文の Pron とは別の起源を仮定しているのである。しかしながらそれでは総称文ではない Pron 文を認めることになり、結局 (20) にとっては甚だ都合の悪いことになってしまうのである。

## 6. 同定文と総称文のつながり

ここで同定文について少し考え直してみる必要がある。例えば (36) における同定関係は (37) のように表すことができるであろう。<sup>18</sup>

$$(37) \lambda x \text{ 当直看護師}(x) = \lambda x \text{ Rina}(x)$$

(36) においては、「当直看護師という属性」と「Rina という属性」が重なり合うのは今日1日だけということになるが、実は同定関係において属性の重なりが現実に生じる必要性は必ずしもない。例えば (38) を考えてみたい。

- (38) a. ジキル博士はハイド氏だ。  
 b.  $\lambda x \text{ ジキル博士}(x) = \lambda x \text{ ハイド氏}(x)$

(38a) は容認可能な同定文であるが、ジキル博士という属性とハイド氏という属性が現実に重なることはない。むしろ相補分布をなすことが同一性の根

拠になりうる。同定文が述べているのは、 $x=x$  という同一性がどのような述語 (= 属性) において成り立つかということである。重要なのは、同定は頭の中でおこなわれる認識作用であって、現実のモノやヒトの一致ではないということである。当たり前のことであるが、目の前に2つのモノが同時にあればそれは同じモノではない。

Greenberg は (34) も (36) も 区別せずに同定文と呼んでいるが、(36) はむしろ特定文 (Specificational Sentence) と呼ばれることが多い。特定文とは (39) のように主語に特定すべき属性を表す名詞句が来て、補語名詞句によってそれを具体的に特定するような文である。

(39) 日本一高い山は富士山である。

(40) でも主語名詞句は特定すべき属性を表している。

(40) 昨日町で会った人はジョンである。

(41) あそこに見える男はジョンである。

(41) では、目の前にいて指差せるような対象であるから、現実のヒトであるように感じられるかもしれないが、実際には概念化されている。このことは (39) - (41) の主語の形式からも明らかである。

(42) a. 日本一高い (山)

b. 昨日町で会った (人)

c. あそこに見える (男)

重要な内容を修飾語すなわち属性として括り出し、主要語には意味が希薄な「山」「人」「男」などが来ている。モノそれ自体ではなく属性すなわち概念こそが重要だからである。

同じことは (34) や (38a) のような狭義の同定文においても言える。(34) の主語や補語の役割を明示して日本語訳すると次のようになる。

(43) ダニーという人はコーエンという人だ。

固有名詞といえども概念化すなわち属性化しなければならない。繰り返しに

なるが、同定判断は頭の中でおこなわれる認識作用であるからである。そして、主語が概念であるならばそれと同定されるものもやはり概念でなければならぬ。これが (38b) で示した論理式の意味である。

主語を概念化することは総称文においても重要な意味を持つ。日本語の「というもの」という表現がまさにこの概念化に当たる。「もの」というのは上で見た「山」や「人」、「男」をさらに抽象化し、意味内容すべてを述語化し、無色透明な変項相当部分だけを残したものと言える。そもそも総称文は目の前の場面について述べたものではなく、むしろ場面を超えた認識作用である。例えば、英語の DS 総称文は、定冠詞という本来目の前の場面に結びつきやすい言語表現が特定のモノではなく概念を表してはじめて成立する。

(44) The Coke bottle has a narrow neck.

(45) コーラ瓶というものは細い首を持つものだ。

例文 (44) を総称文として解釈するためには、主語は概念すなわち「(良く確立された) 種としてのコーラ瓶」でなければならない。日本語では (45) のとおり「というもの」という形でそれを示すことができる。総称とは、目の前の具体的な一つのモノではなく、それを概念的に包み込む種全体について述べることであり、そこでは概念化が重要な役割を果たす。同定が概念同士でおこなわれるのであれば、補語にも同様のものが要求される。例文 (44) の日本語訳 (45) において、目的語が「細い首を持つもの」という形で補語化している点に注意されたい。総称文における同定解釈を明示化するとき、日本語では英語の一般動詞 have があたかもコピュラ文であったかのように表現されるのである。<sup>19</sup>

さて、第3節においては、英語の IS 総称文に対して「というもの」という訳語を与えた。

(4) a. Dogs have four legs. (犬は4本脚である。)

b. A dog has four legs. (犬というものは4本脚である。)

IS 主語を総称として解釈するためには量化を必然的に伴い、そこでは dog (x) のように変項として解釈することが前提であると述べた。すなわち、「というもの」という表現は主語の意味内容をほとんどすべて属性として括り出し概念化する手段なのである。

ヘブル語においても (46b) のように単数主語の総称文は Pron を義務的に伴う。

- (46) a. 'orvim \*(hem) (yecurim) šxorim. (複数)  
 ravens PRON(3PL) creatures black  
 “Ravens are black (creatures).”  
 カラスというものは黒いものだ。
- b. 'orev \*(hu) šaxor (単数)  
 raven PRON(3MS) black  
 “A raven is black.”  
 カラスというものは黒い。

単数形を総称として解釈するには、すでに述べたように変項として数え上げるという量化が必要であるから、主語の概念化は必然である。興味深いのは複数形の (46a) には補語に creatures が随意要素として補われているところである。Greenberg の意図は不明であるが、我々の考える意味での同定の解釈を強く求めていることは確かである。他方、(46b) ではそれが見られない。憶測であるが、複数形の (46a) では同定の解釈を強く意識しないと Pron が削除可能になるのではなからうか。Greenberg は Pron の存在と総称性を結び付けているのだが、Pron はなくても総称文自体は可能であり、むしろデフォルト総称文は -Pron であるのかもしれない。少なくとも Pron は随意的であると思われる。ここでは、Pron を義務的にするためにわざわざ同定の解釈すなわち補語の概念化を求めているに違いない。いずれにしても Greenberg が同定文を総称文から外してしまったのは、まったくの見当違いと言わざるをえない。総称文と同定文には本来密接な関係があるのである。そして Pron は代名詞的のコピュラであって、主語と一致するものであった。日本語の「というもの」に働きが類似していてもまったく不思議ではない。

## 7. もう一つの Pron 文

最後に、ヘブル語における別の Pron 文について Greenberg (2008) が論じている用例の一部だけ紹介することにしよう。ヘブル語の Pron には上で論じた H 型 (H-Pron) の他に Z 型 (Z-Pron) があると言う。Z-Pron の生起条件は複雑であり、本論文で十分に扱う余裕はないが、Greenberg はそれ

を同定文と考えている。すでに述べたように、Greenberg 自身は同定文を総称文の枠組みから外してしまっているが、(47) (48)に見られるとおり、Z-Pron 文が紛れもなく総称文として使われている。(47a) は述語が形容詞であるが、(47b) と (48) では「道具」「生きもの」など内容が希薄な名詞が補われているところも注目される。

- (47) a. maxSev            nayad            hu / ze            kal  
 computer.MSC   mobile.MSC   H.MSC / Z.MSC   light.MSC  
 'A laptop is light'  
 ノート PC というものは軽いものだ。
- b. maxSev            nisa            ze (maxSir)            SimuSi  
 computer.MSC   portable.MSC   Z.MSC (instrument.MSC)   useful.MSC  
 'A laptop is (a) useful (instrument) '  
 ノート PC は便利 (な道具) だ。
- (48) student        ca'ir            hu / ze            yecur            'aclan  
 student.MSC   young.MSC   H.MSC/Z.MSC   creature.MSC   lazy.MSC  
 'A young student is a lazy creature'  
 若い学生というものは怠惰な生きものだ。

Z-Pron の特異性は、H-Pron が主語と性数の一致をするのに対して、補語の方と一致することである。あるいは一致をせず中立的な場合もある。

- (49) a. clila            hi / \*zot / \*ze            mesukenet  
 diving.FEM   H.FEM/Z.FEM/Z.MSC   dangerous.FEM  
 'Diving is dangerous'  
 ダイビングというものは危険だ。
- b. clila            ze            mesukan  
 diving.FEM   Z.MSC   dangerous.MSC  
 'Diving is dangerous'  
 ダイビングというものは危険なものだ。
- c. clila            hi / zot            pe'ilut            mesukenet  
 diving.FEM   H.FEM/Z.FEM   activity.FEM   dangerous.FEM  
 'Diving is a dangerous activity'  
 ダイビングというものは危険な活動だ。

(49a) では主語の性が女性で、補語形容詞はそれに一致している。この場合に可能な Pron は H 型だけであって、Z 型は女性形であれ男性形であれ不可能である。ちなみにヘブル語におけるデフォルトの性は男性形であるので、中立的な場合は男性形が現れる。(49b) は補語形容詞を主語に一致させない場合で、Z-Pron だけが可能であり、中立的な男性形をとって現れる。(49c) では補語名詞が女性形であり、Z-Pron はそれに一致して女性形をとって現れる。ここでは H-Pron も可能な選択肢であるが、その場合は (49a) と同様、主語と一致して女性形なのである。この一致現象から (49a) は叙史的、(49b) と (49c) は同定的であると考えられる。(49b) は、(49c) のような明示的補語名詞を補うことなく、形容詞のままで同定文を構成することができるのである。ここで Z-Pron は補語に一致する代名詞的要素であり、日本語の「危険なもの」という訳語に相当する機能を果たしていると見なして良いであろう。機会を改めてヘブル語の Z-Pron の特徴を整理し、同定文への洞察を深めてみたいが、ここでは同定文が総称性と深く関わり、多様な有標総称文の一例となっていることを指摘できれば十分である。

## 8. 結論と今後の見通し

本論文ではヘブル語 Pron と日本語の「というもの」「ものだ」の類似性に着目して総称文の多様性を論じた。Pron には H 型のほかに Z 型も存在し、かなり複雑な文法現象であるが、それが動詞的コンピュータに代わる代名詞的要素であることから、日本語の「もの」との類似性を想定した見通しは間違っていないと思われる。その基本的な機能は名詞句の概念化・属性化である。概念化・属性化した名詞句に対しては、量化や同定が可能になる。ここで量化は大人の認知能力に相当するものであった。同定についても同様であると推測できるが、少なくともヘブル語の Pron は、我々が検証中の総称文研究の枠組みにおいて有標総称文の一つに位置づけるべきである。ヘブル語のデフォルト総称文の形式については、Greenberg が一般動詞の総称文を扱っていないため、現時点では議論をさらに先に進めることが困難であるが、コンピュータ文については -Pron であるか、あるいは少なくとも Pron の使い分けが（厳格で）ないと考えられる。

ところで、同定判断を表す場合、英語では一般動詞で表現される内容を日本語では主題題述文で表すことが可能であり、コンピュータ文に類似の構造とな

ることを第6節（例文（45）および注19）で述べた。例文（45）や（4a）の動詞 have 以外の動詞についても同様であろう。例えば Bears eat honey（熊は蜂蜜を食べる）は日本語では「熊は〔蜂蜜を食べるもの〕だ」という同定文への転換が容易である。元の文が「・・・は・・・」という主題題述文であるため、「動物」「もの」などを付加するだけでそのまま同定文になる。さらに「ものだ」が一つにまとまって文法化すると「熊は蜂蜜を食べる〔ものだ〕」という内在的必然性を表すモダリティ表現につながる。ヘブル語における Pron にも同様の機能があるとすれば、Pron 文はいわゆるコピュラ文だけではなく、同定構造を通じて一般動詞までも含み込む広がりを持ちうるのかもしれない。そもそも Pron はコピュラであるのに、それをあたかも総称性一般の指標であるかのように論じる Greenberg の意図が当初は理解不能であったが、ここで指摘した日本語との類似性が正しいとすればある程度理解できなくもない。

以上を含めて（2）の「認知能力に基づく総称文研究の枠組み」を改訂すると（50）のようになる。本論文での新しい主張は太字で示している。

（50）認知能力に基づく総称文研究の枠組み（改訂版）

速い思考（システム1）：子供の認知能力（危険回避・直観的行動，社会的偏見，脳の負担小）

デフォルト総称文：Striking Generic 可能，複数形の使用，冠詞の使い分けが（厳格で）ない（英語・ドイツ語・フランス語），**Pron の使い分けが（厳格で）ない（ヘブル語）**

遅い思考（システム2）：大人の認知能力（社会的偏見を避ける論理的行動，脳の負担大）

有標総称文：冠詞の使い分け（不定冠詞単数，定冠詞単数，不定冠詞複数（フランス語）），量化（数量詞，法性），「**というもの・ものだ**」の使い分け（日本語），二重否定，**Pron の使い分け（ヘブル語）**，**同定文**，**エピソード的総称文**

本論文では、デフォルト的認知能力と英語総称文の多様性から着想を得て、さらにドイツ語、フランス語、日本語のデータを加えた「認知能力に基づく総称文研究の枠組み」に対して、ヘブル語 Pron 文による検証をおこなった。ヘブル語に関する Greenberg の主張は当初この枠組みに反するように思われたが、よく観察してみるとこの枠組みに収まるものであり、さらに

は逆に総称文の多様性を裏付けるものであることがわかった。ついでながら、議論の途中で出てきたエピソード的総称文(例文(27), 注14参照)は、D-Genericである(=主語が種全体を表す)こと以外に総称文としての有標的文法標識が見られないが、これを語用論的に総称文として解釈するには少なくとも十分な背景的知识が必要であるという意味で、すなわち幅広い大人の認知能力を前提としていると言う意味で、下段の有標総称文の分類に付け加えておく。Greenbergの主張とは異なり、-Pron文、H-Pron文、Z-Pron文など複数のヘブル語構文が総称文の多様性を裏付けており、日本語との間にも無視できない類似性があることが判明した。今後は、ヘブル語Z-Pron文のさらなる分析を進めるとともに他言語における総称文の多様性にも視野を広げることで、枠組みの検証を進めたい。

## 注

\* 本論文は科学研究費基盤研究(C)(2020-2022)「総称文研究における認知能力に基づいた枠組みの検証」(課題番号20K00681)によるサポートを受けている。

1. 不定冠詞のつく単数形は可算名詞の場合であり、不可算名詞の場合は当然無冠詞単数形(Bare Singular)となる。本論文では不可算名詞の例は取り扱わないが、基本的に無冠詞複数形と同様に考えている。
2. 参考文献にあるLeslieの各種文献を参照。手始めにはLeslie(2016)が入手しやすく、従来の総称文研究を整理し課題点を明らかにしている。
3. Leslieによれば、デフォルト的認知能力はKahneman(2011)の「速い思考(=システム1)」に相当し、直観的な思考に対応する。それに対し、「遅い思考(=システム2)は論理的・数量的であるが、脳に大きな負担がかかる。Gelman et al.(2015)を始め、いくつもの心理学的研究から、総称文は前者に数量詞は後者に属すると考えられている。
4. IS主語には「というもの」という日本語を当てている。これについては、第3節を参照。
5. DS主語にもIS主語と同様に「というもの」を付加しているが、これについては注7を参照。
6. フランス語において、ISやDSの用法は英語と共通であることを確認している。また、フランス語には英語には存在しない不定冠詞複数

(des) を用いた総称文も存在する (以上, 岩部 (2019) 参照)。また, フランス語定複数形が総称的に使用された場合は複数性が希薄であり, 単数形の代名詞で受けることが可能である (用例は武本雅嗣氏の指摘による)。

a. Les enfants, ça grandit vite. (子供は成長が早い。)

b. Ces enfants, ils grandissent vite. (この子供たちは成長が早い。)

しかし, 定複数形が総称ではなく通常の用法, すなわち特定の子供たちを指している場合は, b の ces enfants と同様に複数の人称代名詞 ils で受ける。

7. 日本語の「というもの」は IS だけでなく, DS にも対応している可能性がある。例えば (6b) の The Coke bottle が総称文で用いられた場合は, 特定のコーラ瓶ではなく, 話者と聞き手の間で共有されている概念を表している。したがって, この例文には「コーラ瓶というものは細い首を持つものだ」という日本語訳がふさわしい。すなわち「[コーラ瓶というもの] は [細い首をもつもの] だ」という同定文による総称表現に相当する。この点については, 第6節で論じる。
8. 従来の量化分析は BP と IS の区別をしておらず, BP の dogs も dog(x) という変項表示に相当すると考えている。私はデフォルト総称文としての BP は量化を前提としないものと想定している。ただし, (9b) で述べたように, 認知能力が発達した後では IS と同様に量化の解釈も可能になる。
9. ちなみに, ヘブル語に定冠詞はあるが不定冠詞はないとされている (池田 (2011: 34) を参照)。
10. Greenberg (2002) では, 随意的な場合も含めて仮説が見直されている。後述の (20) を参照。
11. Doron (1983) は, 同定文において Pron が義務的であるという観察をおこなっている。Greenberg は叙述文でも Pron が義務的である場合があるとして, Doron の観察を否定しているが, この例は同定文に近い解釈であると言える。この点は第6節で再度論じる。
12. (20a, b) の記述の括弧内がいずれも (with subject in Spec, I) になっている。本稿の趣旨には特に影響しないが, (20a) では (with subject in Spec, IP), (20b) では (with subject in Spec, XP) の誤植ではないかと思われる。注17の引用文も参照。
13. 総称的一般化は反実仮想世界においても成り立つとされており, 総称

性を世界項 (w) までも含めた量化とする想定には一定の妥当性があるが、世界項を認めるべきかどうかは議論の余地がある。認識的法性 (Epistemic Modal) を量化の枠組みで記述するためには世界項を仮定する必要があるが、Kratzer (1989=1995) はそれを認めず、Epistemic Modal は量化詞ではないと言っている。以下の Partee (1995) からの引用も参照のこと：Furthermore, we know that not all if-clauses must

restrict quantificational operators (unless we also count quantification over possible worlds in the epistemic case, something Kratzer (1989) has argued against and Iwabe (1989) has argued for) [下線は筆者のもの] (Partee (1995: 587))

私自身、世界項 (w) の導入自体に理念的な違和感はないが、ヘブル語のデータを見る限り経験的に妥当であるとは感じられない。

14. エピソード的総称文は単なる過去の偶発的な出来事を述べているだけで、総称性を表す特別な構文ではないが、これを種の実性として解釈するには相応の背景的知識を学習しておくことが必要であり、当然ながら子供の認知能力では無理であろう。これも総称文と認めるのであれば、(20) の規定する範囲外に量化によらない総称文が存在することになり、エピソード的総称文は総称文の多様性の証拠の一つにもなる。
15. Greenberg は主語が固有名詞の (28) (29) のような例についても総称文として扱っている。英語についても同様の取扱いはよく見られ、ここでもそのように考えたい。総称文には文 (IP) 全体で習慣や規則性を表す I-generic と主語の名詞句 (DP) が種全体を表す D-generic の二種類があるとされ (Krifka et al. (1995)), これらの例は I-generic の一種である。狭義の総称文である Dogs are intelligent などは D-generic であると同時に I-generic でもある。エピソード的総称文 (27) は、その名のとおりに、文全体としては習慣・規則性を表さないが、主語名詞句が種を表す場合に限られており、純粋な D-generic である。
16. 具体的には、場面レベル述語 (Stage-level Predicate) も個体レベル述語も同じように状況変項 (Situation Variable) を含んでおり、違いは、後者においてのみ状況変項が総称演算子によって束縛されているところにある。
17. Greenberg (2002: 291) は次のように述べている。  
The Distribution of Pron in Hebrew Present Tense Nominal Predicative Sentences:

- a. +Pron sentences, namely full IP clauses with external subjects, are semantically tripartite structure headed by a universal modal, unselective operator, and are interpreted as generic and modalized.
- b. In contrast, -Pron sentences, namely XP clauses with internal subjects, are not headed by such a Gen operator, and are interpreted as accidental and extensional.

つまり-Pron 文は、本来現実世界における偶発的なことがらと解釈されるものであり、何らかの永続性があるならば別途保証されなければならないことになる。

- 18. ここでは固有名 Rina を述語として扱っている。和泉 (2016) は、固有名の述語説を有力な理論として主張している。
- 19. 日本語においては、「...は...だ」という主題題述文によって表現されておりコピュラの実在感希薄である。少なくとも、英語の be 動詞に相当するものは含まれない。ヘブル語の Pron 文もコピュラがもはや動詞としては現れず、代名詞化する点が興味深い。

### 参照文献

- Carlson, G. N. (1977) *Reference to Kinds in English*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Chierchia, G. (1995) "Individual-level Predicates as Inherent Generics," in G. N. Carlson and F. J. Pelletier (eds.) *The Generic Book*, 176-223, The University of Chicago Press, Chicago.
- Cimpian, A., A. C. Brandone and S.A. Gelman (2010) "Generic Statements Require Little Evidence for Acceptance but Have Powerful Implications," *Cognitive Science* 34-8, 1452-1482.
- Condoravdi, C. (1992) "Individual-level Predicates in Conditional Clauses," ms.
- Doron, E. (1983) *Verbless Predicates in Hebrew*, Ph.D. Dissertation, University of Texas at Austin.
- Gelman, S.A., S.-J. Leslie, A. M. Was and C. M. Koch (2015) "Children's Interpretations of General Quantifiers, Specific Quantifiers, and

- Generics,” *Language Cognition and Neuroscience* 30-4, 448-461.
- Greenberg, Y. (1998) “An Overt Syntactic Marker for Genericity in Hebrew,” in S. Rothstein (ed.) *Events and Grammar*, 125-143, Kluwer Academic Publishers, Great Britain.
- Greenberg, Y. (2002) “The Manifestation of Genericity in the Tense Aspect System of Hebrew Nominal Sentences,” in J. Ouhalla and U. Shlonsky (eds.) *Themes in Arabic and Hebrew Syntax*, 267-298, Springer, Berlin.
- Greenberg, Y. (2003) *Manifestations of Genericity*, Routledge, New York.
- Greenberg, Y. (2008) “Predication and Equation in Hebrew (Nonpseudocleft) Copular Sentences,” in S. Armon-Lotem, G. Danon, and S. Rothstein (eds.) *Current Issues in Generative Hebrew Linguistics*, 161-196, John Benjamins, Amsterdam.
- 池田潤 (2011) 『ヘブライ語文法ハンドブック』, 白水社.
- Iwabe, K. (ms. 1989) “On Individual-level and Stage-level Predicates in If-clauses,” UMass, Amherst.
- Iwabe, K. (1990) “On Individual-level and Stage-level Predicates in Restrictive If-clauses,” *English Linguistics* 7: 1-13.
- 岩部浩三 (1998) 「総称文と一般化」『英語と英米文学』 33: 1-28, 山口大学.
- 岩部浩三 (2012) 「演繹と帰納—総称文における数量化について」『英語と英米文学』 47: 1-27, 山口大学.
- 岩部浩三 (2014) 「総称文研究の新展開」『英語と英米文学』 49: 1-18, 山口大学.
- 岩部浩三 (2016) 「総称文の多様性と認知能力の複合性—社会的偏見の克服に向けて」『英語と英米文学』 第51号, 1-16, 山口大学.
- 岩部浩三 (2019) 「総称文の謎を認知能力の複合性から解く」『JELS』 36: 24-30, 日本英語学会.
- 岩部浩三 (2020) 「総称文の多様性と認知能力の複合性—英語から他言語へ」筑波英語学会第41回大会 (2020年11月28日), 筑波大学 (オンライン開催).
- 和泉悠 (2016) 『名前と対象—固有名と裸名詞の意味論』, 勁草書房.
- Kahneman, D. (2011) *Thinking, Fast and Slow*, Penguin, London.
- Kratzer, A. (1989, 1995) “Stage-level and Individual-level Predicates,” in G. Carlson and F.J. Pelletier (eds.) *The Generic Book*, The University of

- Chicago Press, Chicago.
- Krifka, M., F. J. Pelletier, G. N. Carlson, A. ter Meulen, G. Chierchia and G. Link (1995) "Genericity: An Introduction," in G. N. Carlson and F. J. Pelletier (eds.) *The Generic Book*, 1-124, The University of Chicago Press, Chicago.
- Leslie, S.-J. (2007) "Generics and the Structure of the Mind," *Philosophical Perspectives* 21-1, 375-403.
- Leslie, S.-J. (2008) "Generics: Cognition and Acquisition," *Philosophical Review* 117-1, 1-47.
- Leslie, S.-J. (2016) "Generic Generalizations," in E. Zalta (ed.) *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, (<https://plato.stanford.edu/entries/generics/>).
- Leslie, S.-J. (2017) "The Original Sin of Cognition: Fear, Prejudice and Generalization," *The Journal of Philosophy*, 114-8, 1-29.
- Leslie, S.-J., S. Khemlani, S. Prasada and S. Glucksberg (2009) "Conceptual and Linguistic Distinctions between Singular and Plural Generics," *Proceedings of the 31st Annual Cognitive Science Society*.
- Mari, A., C. Beyssade and F. Del Prete (2013) "Introduction," in A. Mari, C. Beyssade and F. Del Prete (eds.) *Genericity*, 1-92, Oxford University Press, Oxford.
- 小田涼・岩部浩三・二宮哲・東郷雄二 (2018) 「総称文の対照言語学—英語・スペイン語・フランス語における総称—」『フランス語学研究』52, 113-121, 日本フランス語学会.
- Partee, B. H. (1995) "Quantificational Structures and Compositionality," in Bach, E. et al. (eds.) *Quantification in Natural Languages*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Prasada, S. (2010) "Conceptual Representation and Some Forms of Genericity," in F. J. Pelletier (ed.) *Kinds, Things, and Stuff*, 36-59, Oxford University Press, Oxford.
- Schaden, G. (2013) "Two Ways of Referring to Generalities in German," in A. Mari, C. Beyssade and F. Del Prete (eds.) *Genericity*, 157-175, Oxford University Press, Oxford.